

コロナ禍のもとでの特別展： 「大阪アンダーグラウンド」展を中心とした 大阪市立自然史博物館の事例

大阪市立自然史博物館 学芸員 石井陽子

1. はじめに

2020年1月より始まった新型コロナウイルス感染症の流行による「コロナ禍」は、何度かの流行のピークを経て、この原稿を執筆している2021年末も継続中である。感染症の流行を抑制するために人と人の接触を減らす必要が生じ、行動規制せざるを得なくなることから、社会に深刻な影響を及ぼし続けている。博物館施設もその例外ではなく、日本国内においても度重なる緊急事態宣言や移動の自粛要請により休館を余儀なくされ、普及行事の中止や実施方法の変更、調査研究や資料収集のための出張の中止など大きな影響を受けている。緊急事態宣言が解除された比較的感染者数が少ない期間であっても、展示室内の滞留人数に制限を設ける、あるいは来館を事前予約制にする、普及行事の定員を減らし可能なものはオンライン化するなどの対応を行う必要が生じた。

2. 大阪市立自然史博物館とコロナ禍

大阪市立自然史博物館（以下、自然史博物館と略す）は他の5つの館とともに2018年度より地方独立行政法人大阪市博物館機構の運営に移行した。コロナ禍は地方独立行政法人移行後の2年目が終わろうとしている時期から4年目にかけてのできごとである。2020年2月～2021年12月20日までのコロナ禍の経緯と自然史博物館が受けた影響の時系列を図1に示す。

最初の緊急事態宣言を含む2020年2月29日～6月1日の間、大阪市立自然史博物館もまた、休館要請を受け休館となった。次の項目で詳しく述べるが、この間に予定されていた自主企画展は中止や大幅な会期変更を行わざるを得なかった。普及行事についてもコロナ禍以前は対面を前提として計画されていたため、大阪府より集会・イベント中止要請が出された2020年2月19日から1回目の緊急事態宣言が解除される5月21日に加え、安全に普及行事を行う事が難しいと判断した同年7月31日までの間、自然史博物館では全ての普及行事を中止とした。1回目の緊急事態宣言の間にこの事態が長引くことを予想し、展示室や普及行事で使用する部屋の定員を少なくする、普及行事実施のガイドラインを決める、講演会形式の普及行事のオンライン化、オンラインで楽しめるコンテンツの充実を行うなど、さまざまな対策を講じ

た。大阪府より府県境をまたいでの移動の自粛を要請された同年12月3日から2021年2月29日まで（2回目の緊急事態宣言を含む）について休館の要請は無かった（1月12日～3月12日は以前から計画されていた建物改修のため休館）。この期間は対面での普及行事を中止としたが、オンライン配信体制が整っていたため講演会形式の行事はオンラインで実施することができた。特に2020年度はワクチン接種が行われていなかったため、緊急事態宣言が出ていない期間であっても大規模な対面形式の普及行事を中止、または実施内容を変更してオンライン配信とした。2020年度の詳細は「大阪市立自然史博物館館報46」を参照されたい。

2021年度には緊急事態宣言が2度にわたって出された。通算3回目の緊急事態宣言（4月25日～6月20日）では大阪府より要請があり休館となった。この期間の自主企画展は会期の変更を余儀なくされた。一方、4回目の緊急事態宣言（8月2日～9月30日）の間は特に要請がなく開館を継続した。3回目・4回目の緊急事態宣言を含む4月8日～9月30日の間は、まん延防止等重点措置が適用されたため対面での普及行事を中止とせざるを得なかった。

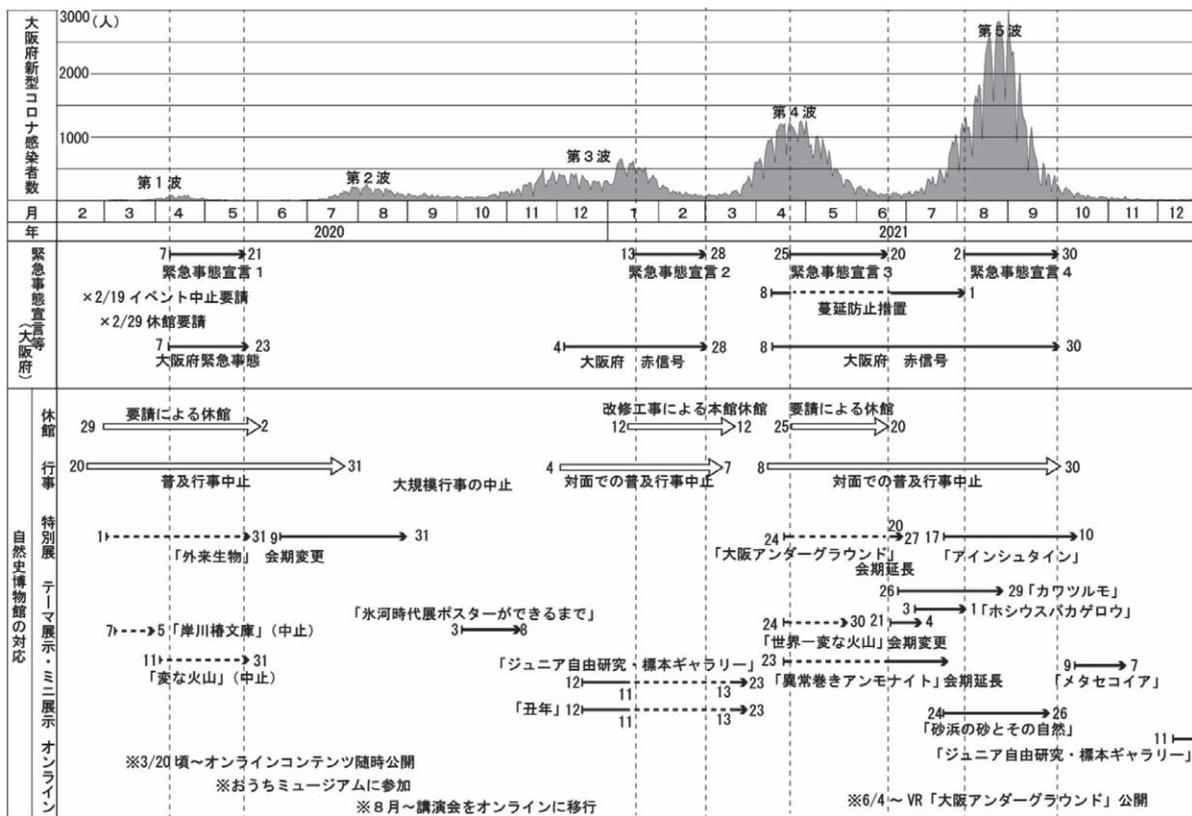


図1 コロナ禍と大阪市立自然史博物館の対応
矢印の両端の数字は日付。点線部分は展示の公開ができなかった期間。

3. コロナ禍と特別展

自然史博物館の自主企画展は、規模により、特別展示、企画展示、テーマ展示、ミニ展示に分類される。特別展示はネイチャーホールを会場とし、別途入場料を徴収する。企画展示はネイチャーホールの一部を用いて展示を行うが、博物館本館の入館料のみで観覧できる。テーマ展示とミニ展示は自然史博物館本館で行い、本館入館料のみで観覧できる。テーマ展示は数個以上の展示ケースを用いるが、ミニ展示は1・2個の展示ケースのみの小規模なものである。

コロナ禍が自然史博物館の自主企画展に与えた影響は重大であった。2020年2月29日～5月21日の1回目の休館の時期には、特別展「知るから始める外来生物」（予定していた会期は3月1日～5月31日）、テーマ展示「岸川椿文庫」（予定していた会期は3月7日～4月5日）、テーマ展示「世界一変な火山」（予定していた会期は4月11日～5月31日）が重なった。「岸川椿文庫」展、「世界一変な火山」展は中止、「知るから始める外来生物」展は再開後の6月9日～8月31日に会期を変更した。これは同年夏に計画していた誘致展が中止となったため可能になった。2021年4月25日～6月20日の2回目の休館の時期には、特別展「大阪アンダーグラウンドー掘ってわかった大地のひみつー」（予定していた会期は4月24日～6月20日）、テーマ展示「世界一変な火山」（前年度に中止になったもので、2021年度に予定していた会期は4月24日～5月30日）、ミニ展示「和泉層群から41年ぶりに新種記載された異常巻アンモナイト」（4月23日～6月20日）が重なった。それぞれ、「大阪アンダーグラウンド」展は6月27日まで、「世界一変な火山」展は7月4日まで、「異常巻アンモナイト」展は7月18日まで会期を延長した。以下、特別展の概要と休館時の対応を述べる。

(1) 2020年度特別展「知るから始める外来生物」

「知るから始める外来生物」展は、外来生物問題を科学的に取り上げ、人の行動が生物多様性に与える影響を広く知ってもらうことを目的としていた。数年前から行われた市民参加型の外来生物調査により明らかにされた大阪周辺の実態が詳しく紹介され、来場者にとっても、身近で重要な問題であることを理解してもらえる展示であった。展示が完成した状態で休館となり、休館期間中は生品の維持が必要となった。従来、ギャラリートークは会期中の土日に行われることが多かったが、事前申し込み不要で参加人数を事前に把握することが難しく参加者が密集しがちになる。このため、対面でのギャラリートークの実施は困難であると判断し、休館期間中に動画を撮影してYouTube 大阪市立自然史博物館チャンネルで公開した。子どもワークショップについても、同様の理由から実施が困難であると判断し、子ども向けの動画を作成し公開した。この時の休館要請は何度も延長され、会期変更のプレスリリースが5月26日となり、すでに掲示されていたポスターに変更された会期のシールを上から貼ってもらうなどの対応を行った。当初の会期中に外部講師を招いての特別展普及講演会が2回計画されていたが、中止となった。一方、当館学芸員が講師を務める自然史オープンセミナー（2回）は、延長された会期に日程変更の上、オンライン配信で行った。変更された会期中に8261名の来場があっ

た。詳細は「大阪市立自然史博物館館報 46」にまとめられている。

(2) 2021 年度特別展「大阪アンダーグラウンドー掘ってわかった大地のひみつー」

「大阪アンダーグラウンド」展は、地球の中心部から土壌まで知られざる地面の下の世界を、館蔵品を中心とする実物資料を用いて紹介し、直接見ることの難しい地面の下の世界に関心を持ってもらうことを目的とする展示であった。地学系学芸員と植物担当学芸員が企画を行い、動物・昆虫分野の学芸員も展示に関わったため、結果的に学芸員をほぼ総動員する形になった。

●展示の構成（図 2 参照）

「地面の下の調べ方」地面の下を調べる方法を、道具の実物を中心に紹介した。

「地下 6400km から数 km までの世界」地球の構造、地球をつくる物質とその探り方、地球の構造やその運動が原因で起きる地震や火山などの現象、鉱物資源を紹介した。

「地下数 km から数 100m の世界」日本列島や大阪周辺の山々を作る岩石を紹介した。

「地下 2000m から数 m の世界」大阪平野の地下の地層の特徴やその構造、そこから見つかる様々な化石を紹介した。大阪平野の地層が氷期・間氷期変動の影響を受けながら形成されたことや、断層の活動により地層のたまる場ができたことにも触れた。人間の地下利用、地下水などの資源についても紹介した。

「地下数 m から地面の世界」地面の下に棲む大小様々な動物たち、根を伸ばして水分や栄養を吸収し身体を支え、あるいは逆に栄養を蓄えるなどしている植物、物質のやりとりを介してそれらを結びつける菌類の働きなど、地面の下の生態系を紹介した。

「調べてみよう地面の下」博物館行事の紹介を通じ、地面の下を自分でも調べてみることを提案した。

その他：「地面の下の調べ方」と「地下 6400km から数 km の世界」の間にトンネルを設置した。このトンネルは展示の大きな区切りとなり、これをくぐることにより、来館者は地表の世界から地球の中心に誘われ、気分を変えて展示を見ることができると期待された。

●会期：2021 年 4 月 24 日（土）、6 月 21 日（月）～27 日（日）の 8 日間。当初は 4 月 24 日～6 月 20 日の予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行による緊急事態宣言と、それに伴う休館要請により 4 月 25 日より休館となった。休館は当初 5 月 11 日までの予定であったが複数回の延長を経て予定されていた会期末の 6 月 20 日まで継続したため、資料を借用していた諸機関やこの後に予定されていた「アインシュタイン」展の運営者と調整を行い、6 月 27 日まで会期を延長した。6 月 21 日は月曜日で通常は休館であるが、植物園の臨時開園に合わせて臨時開館とした。会期延長の広報は 6 月 18 日に館 Web サイトで行った。

●入場者：1241 人。有料合計 559 人（大人 493 人、高大生 43 人、その他 23 人）、無料合計 682 人（中学生以下 166 人、高齢者 199 人、その他個人 317 人）

●キッズマップ・キッズパネル：展示の見どころを子ども達にわかりやすく伝えるために、キッズマップ（図 2）を作成、配布した。会場内にキッズパネルを 6 ヶ所設置した。

●関連行事：計画されていた 3 回の普及講演会のうち 2 回、自然史オープンセミナー（全 2

4. コロナ禍下に特別展を担当して

「大阪アンダーグラウンド」展は、地質学を専門とし地域で得られた地質資料を扱う学芸員が中心となって企画し、生物学や古生物学の様々な分類群を専門とする学芸員の協力を得て実現した展示であり、「地面の下」という着眼点で館蔵品を中心に構成した自然史博物館ならではのものとなった。多種多様な資料が並び、特に終盤では地面の下の生態系の豊饒さを実感でき、見て楽しい展示となった。従来からの自然史博物館のファン層に加え、ボーリングマシンを地質調査会社から借用する、ボーリングコアを中心とした地質資料を多く展示するなどしたため、地質調査業や地盤工学の関係者に自然史博物館を知ってもらい新たなファンを獲得することができるチャンスでもあった。短い期間しか公開できなかったことは非常に残念である。

休館期間が何度も延長され、再開館の見通しが立たない事態が長く続いたが、これは展示を準備した学芸員のみならず、特別展に期待を寄せていた市民や、広報を行い市民からの問い合わせに対応する事務職員にも辛いものであった。会期延長のための調整を5月中旬から行っていたが、会期延長の広報は当初の会期終了直前の6月18日まで行うことができず、特に6月に入ってから問い合わせ対応には苦慮させられた。

前年度よりオンライン配信の体制を整えていたため、講演会形式の普及行事については中止にせず済んだ。講演会のオンライン配信には遠方の人に参加できる、当日都合の合わなかった人も見逃し配信を見ることができるといった利点があり、コロナ禍後も継続することになるだろう。対面での実施を前提とした行事も、一部はZoomを用いて実施、他のものについても動画コンテンツとして公開することができた。マターポートによるVR展示は、小さな昆虫標本などを見ることは難しいが、多くの展示品を見、パネル、ラベルの文字を読むことができる高解像度なもので、関連動画や文献へのリンクを付けることもでき、実際の展示室とは異なる楽しみ方が可能である。しかしながら、展示という「場」の持つ力は大きく、その役割のすべてをオンラインに置き換えることは不可能であると考えられる。展示室では無意識のうちに他の来館者の影響を受けるが、VR展示には他の来館者の姿はない。また、実物を直接目にするだけでしか伝わらない要素もあるためである。

現代は、人口が多い上に人の移動が活発で、環境破壊の著しい人新世という時代であり、このコロナ禍の後にもパンデミックが起こらないとは限らない。パンデミック下であっても、博物館施設は講演会のオンライン配信やコンテンツの公開などで活動を継続できるが、展示や一部の普及行事についてはオンラインでの代替が難しいことも痛感させられた。博物館施設は、社会が正常に機能している状態でこそ十分な活動ができる。パンデミック下では、行動規制を行う期間を極力短くするよう、社会全体での対策を早めに行い感染拡大を防ぐ必要がある。特別展の期間を長く確保して、会期のすべてが休館に重ならないよう、リスクを分散させることも必要かもしれない。コロナ禍が早く収束することに期待すると同時に、コロナ禍の経験を記録に残し教訓としたい。

参考文献・サイト

大阪市立自然史博物館 館報 46

https://omnh.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=1617

YouTube 大阪市立自然史博物館チャンネル

[https://www.youtube.com/c/ 大阪市立自然史博物館](https://www.youtube.com/c/大阪市立自然史博物館)

VR 「大阪アンダーグラウンド」展 <https://my.matterport.com/show/?m=yYBfJ35Kh7>

